

河川・湖沼に関する絵本にみるテーマの変遷

Theme Changes in the Illustrated Books on River and Lake.

吉富友恭*

Tomoyasu Yoshitomi

ABSTRACT: Illustrated book is an effective, visual, and informative medium for environmental education. In this study, the trends of theme and contents in illustrated books on river and lake are traced. Reviewing the illustrated books published in Japan since the 1960s, changes of theme and contents are evident. Recently, the message in the illustrated books have put an emphasis on life and its environment from ecological view. Particularly, realistic problems in environment, as destruction of habitat, water pollution, and so on have been increased since the 1990s. It is shown that the message tend to emphasize the web of life and environment to evoke concern with environmental conservation.

KEYWORDS: Illustrated book, River, Lake, Theme, Environmental education, Environmental conservation, Ecological view.

1. はじめに

近年、環境教育の必要性が高まり、自然に関する知識や情報の伝達の役割を担うメディアが多様化する中、その効果的な手法が模索されている。河川や湖沼の情報を伝達する手段も様々である。近年の水族館展示の傾向をみると、生物を実際の生息環境を再現した中で展示して生態的な関係性を視覚的に訴える手法や、シナリオ構想によってストーリー性を演出する等の効果的な手法が、環境教育に寄与する先進例としてみることができる¹⁾。

絵と文で構成される絵本は、視覚的な伝達要素の割合が高く、ストーリー性をもつという表現性から、環境教育における効果的な視覚伝達メディアの1つとして考えられる。自然科学分野の絵本は幼児期からの自然観の形成に大きく影響するものと思われ、また、環境教育の初期段階の目標である自然に関心をもつきっかけづくりに役立つと考えられる。また、絵本のテーマには、出版された時代の自然観が投影されると考えられ、その時代の人々の自然の捉え方を知るための媒体としても興味深い。従って、絵本に関する研究は、自然に関する知識や情報の伝達手法について研究を進める上で、意義のある知見を提供するものと考えられる。しかしながら、これまでに絵本を対象としたこのような側面からの調査・研究はなされていない。

本研究では、現在出版されている河川・湖沼に関する絵本を収集・整理し、その中にとりあげられる内容の特徴について捉え、さらに、テーマがどのような切り口で定められ絵本に反映されてきたのかについて時系列的に分析し、その変遷を辿ることとする。

*建設省自然共生研究センター Aqua Restoration Research Center, Ministry of Construction
科学技術振興事業団 特別研究員 Research Fellow, Japan Science and Technology Corporation

2. 絵本の選定と調査の概要

広辞苑の解説によると、絵本とは「1. 挿絵のある書籍。絵の本。絵草紙。」、「2. 絵の手本。」、「3. 絵を主体とした児童用読み物。」であるとされている。本研究では「3. 絵を主体とした児童用読み物。」を対象とし、絵本を「絵が主題を統一的に表現する構成を持った本。」と定義する。写真で構成されたものや、図鑑のようにストーリー性の無いものは調査の対象外とした。

調査にあたり、まず最初に日本児童図書出版協会加盟の出版社 46 社の最新の図書目録を収集した。その中に記載された書籍のうち、小学生以下を対象とした児童図書に分類されるものを選定の対象とした。児童図書に分類された項目に記載されたタイトルと解説を参考に、河川・湖沼に関連した内容が扱われた絵本を選定した後、実物について確認した。選定基準は、河川・湖沼に関する事物・事象についての絵の描写や言葉の直接的な記載があるものとした。

以上の基準により選定した絵本を収集し、それぞれの内容の詳細について調べた。まず、掲載されている事物や事象、ストーリーについて、その傾向と特徴について整理した。次に、初版年度を参考に時系列的に辿り、現在までにどのようなテーマが絵本にとりあげられてきたのかを分析した。

3. 選定結果

日本児童図書出版協会加盟の出版社 46 社の児童図書総数は 27,067 点であり、このうち、絵本は 6,507 点、全体の 24%を占めた。その中から、河川・湖沼に関する絵本として 49 点を選定した^{2) -50)}。それらは絵本全体の 1%未満であった。初版年度の最も古いものは 1962 年に出版されたものであった。なお今回の調査では、図書目録は各社最新のものを参考にしたため、過去に出版されていても既に絶版になっている絵本や、海外の絵本で著作権契約期間が切れて目録から削除されているものについては調査できていない。

4. 場面と主人公

ストーリーが展開される場面は、河川が最も多く 29 点、湖沼（池）が 16 点、両方の場面が現れるものが 4 点であった。いずれについても、人の生活の接点、そして、生物の生息地としても重要な、水際のシーンが多いことが特徴的である。また、河川では上流から海へ流れ込む川の水の流れに沿ってストーリーが展開されるものが多く、これは河川の絵本独特の特徴であると思われる。その中には、ボートやカヌーに乗って移動しながら場面が移り変わっていくものもみられた。

絵本に登場する主人公は多種多様であるが、魚類（サケ、ヤマメ等）、哺乳類（ヒト、アライグマ等）、両生類（カエル等）、鳥類（ヤマセミ、カワセミ等）、水生昆虫類（トビケラ、アメンボ等）の順に多かった。他にも、カッパのような伝説の生物が登場するものも多くみられた。また、木の葉や水などが主人公とされているものもみられた。人以外のものが登場する場合、擬人化し人格をもたせて表現されているものの割合が高かった。

5. テーマの種類

河川や湖沼に関する絵本の内容は、昔からの言い伝えをもとにした民話や、メルヘンの世界を展開する童話、実際に社会で起きている話題を扱ったものなど様々であるが、テーマについて生態学的な視点から整理すると、以下のような類型に分けることができる。

- 1) 水・空間に関するテーマ：水の化学変化や川の物理作用等、無生物要素に着目したもの。
- 2) 特定の生物の生理・生態に関するテーマ：魚類の遡上等の行動や生活史に着目したもの。

- 3) 生物の相互関係に関するテーマ：食物連鎖、生物間の競争等に着目したもの。
- 4) 生物（人を含む）と環境とのかかわりに関するテーマ：生物の生息地の利用等に着目したもの。
- 5) 環境保全に関するテーマ：自然環境の破壊や汚染の問題等に着目したもの。

6. テーマの変遷

6.1 年代別にみたテーマの傾向

1) 1960 年代

1960 年代初版の絵本は 3 点である²⁾⁻⁴⁾。人の生活環境としての川の様々な場面を上流から下流へと上空から見ていく絵本、水鳥に対する人間の愛情を描いた絵本、そして、主人公のしずくが、水蒸気になったり雨になったり水道水になったりするという水の循環のストーリーが展開される絵本である。

2) 1970 年代

1970 年代初版の絵本は 7 点でテーマは様々である⁵⁾⁻¹¹⁾。ザリガニや、トビケラといった生物の生態に目を向けたものがみられ、一方では、水辺の光や生物がつくり出す風景の変化といった環境に注目した絵本もみられる。また、この時代には童話や民話が目立ってみられる。子どもとカッパとの交流や擬人化したジャコウネズミ姉弟が展開する童話、村人に大水を告げる川だいをたたきながら濁流にのまれた男の伝説（図-1）、カエルに沢を売らないでと頼まれる男の話等である。

3) 1980 年代

1980 年代の絵本は 10 点である¹²⁾⁻²¹⁾。特定の生物の生理・生態に関するテーマや、生物の相互関係に関するテーマが多い時代である。サクラマスが産卵のために遡上するストーリーや、カゲロウを食べたイワナがヤマセミに食べられる等（図-2）、生物どうしの関係がテーマになっているものなどがある。また、アフリカの大地に流れる川を場面としたものもあり、ヌーがライオンに追われながら川を渡るシーンや、ゾウが水浴びするシーン等、野生動物が厳しい自然の中で水と餌場を求めて旅をする様子がとりあげられている。1 点、開発のため森を追われる動物たちをテーマとする絵本がある。

4) 1990 年代

1990 年代初版の絵本の点数は多く 29 点である²²⁾⁻⁵²⁾。1990 年代に出版された絵本のテーマは多様であるが、生物と環境との関係性をとりあげたものが多い。環境のスケールの捉え方も大きく、数人の少年少女が野原に輪になって「もしも



図-1 掛斐川に伝わる民話をもとにした絵本

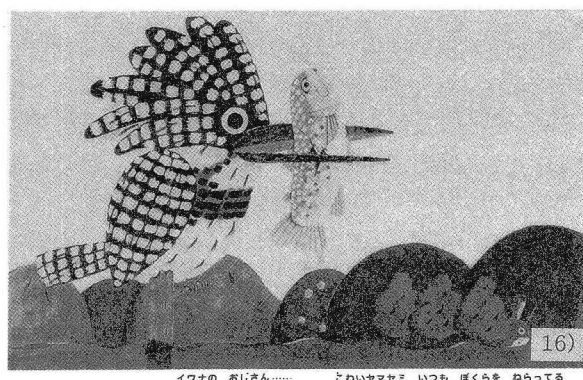


図-2 生物相互の関係をテーマとした絵本

水がなかったら・・・」などと問答をし、地球上のすべてのものが連関しあっているということをテーマにした絵本も存在する。この時代の絵本には、環境問題を知り、保全への関心を高めようというメッセージがより強く表現されているものが多く現れる。具体的には水質汚濁の問題や（図-3）、流域の開発による生物の生息地の破壊等の問題が目立つ。中には、外来種の移入の問題もあり、ブラックバスにより日本在来の魚が捕食されそうになるシーンも現れる。さらに、そのような問題提起のみで終わらず、汚染された池を子供とカエルが協力し合ってゴミ拾いをしてきれいにする等、具体的な行動を読み手に促すメッセージがみられるものも存在する。なお、90年代後半の絵本には、海外原作の翻訳絵本が多くみられ、その中にも環境問題をとりあげたものが多い。

6.2 テーマの流れと社会背景

以上のように、現在までの概ね40年の間に、河川・湖沼に関する絵本のテーマの変遷がみられる。1960年代から1970年代の絵本は、童話や民話、生物の生態に目を向けたものなど様々である。1980年代には、河川や湖沼を舞台として、生物の生態や生物の相互関係に着目したものが多くみられ、生物と河川とのかかわりに関するテーマを題材とするものも現れる。そして、1990年代には、生物と環境との関係性に着目したものが増え、環境保全に関するより現実的な話題をとりあげた絵本が現れるようになる。環境保全に関するテーマには、生息地の破壊、生息地の悪化と汚染、外来種の移入等の問題がとりあげられている。これらは、環境保全の中心的な概念である生物多様性の危機に関わる問題である⁵¹⁾。

このような絵本のテーマの移り変わりから、近年、河川や湖沼は生態学的な視点から捉えられ、生物と環境との多様な関係性へと目が向けられるようになり、さらに、身近な現実的課題についても強く意識されるようになってきたことが理解される。このような変化には、社会的な時代背景が要因の1つとして大きく関与しているものと思われる。我が国では1960年代に公害問題が露呈し、1967年に公害対策基本法が制定されている。その後さらに公害問題は環境問題として地球規模に発展し、1990年代には環境基本計画（1994年）、環境影響評価法（1997年）等、多くの環境保全に関する法律や指針が制定されている。環境保全に関する絵本が現れ、数多く出版されたのはちょうどこの時代にあたる。実際に環境基本計画策定後、その考え方をもとに、環境庁でも自然界の生態系の仕組みや浄化の必要性の理解を促す試みとして絵本を発行している⁵²⁾。

一方、河川事業の観点からは、河川法の改正以前の、治水・利水の考え方を柱に河川事業が進められていた時代には、ダムや堰の設置や従来型の河川改修に対する人々の批判的なメッセージをもつ絵本がみられる。しかし、1990年より建設省では多自然型川づくりが推進され、水質浄化や魚がのぼりやすい川

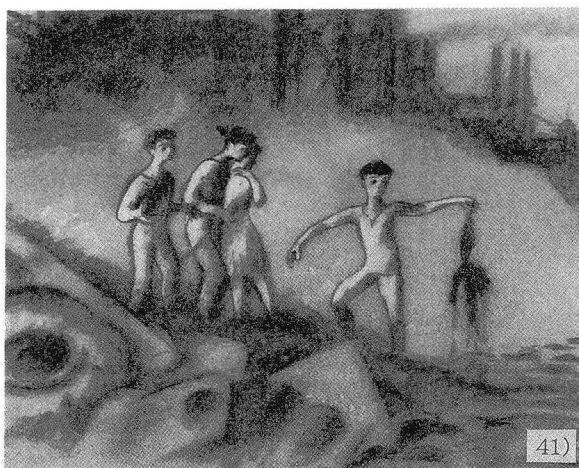


図-3 水質汚濁など現実的な問題が絵本のテーマに

づくり等の事業を積極的に推進している。その後の絵本の中には、ヤマメの稚魚を育てて川に放流する小学校の先生と児童が、ダムの造り方に対して働きかけて新しい魚道が提案される話がある。また、1997年には、河川法の改正により環境の整備と保全が大きく位置づけられる。その結果、市民と行政が一体となって環境に配慮した事業を進めるようになりつつあり、河川法改正後に発行された絵本には、地元の人々が長年つき合ってきた歴史のある堀割を巡り、行政と住民が話し合いの場を設けて協議し、住民が堀割を守ろうと活動を始めるシーンがある。これは時代を反映した内容として非常に興味深い。

以上のように流域の開発など都市化が進むにつれて、環境に関する様々な問題が身近な問題として認識されるようになり、法律や指針の制定等、多くの要素が複合的に社会の人々の要求や絵本作家の意識や自然観にも影響し、河川や湖沼の自然環境に価値を見出すようになったのだろう。その結果が、絵本のテーマの変遷に大きく関与しているものと思われる。

6.3 環境教育の視点から

近年の絵本のテーマの特徴は、人を含む生物と環境とつながりについて着目している点にある。中でも生物多様性の危機に関する問題について具体的にとりあげるることにより、その原因である人と自然とのかわりを見直し、問題を示唆するだけにとどまらず、その問題解決に向けてどのように人が行動すべきかを伝える表現が絵本の中にもみられることは、環境教育の上で興味深い点であり、意義のあるものと思われる。このような生態学的な知識や情報を直接的に扱った絵本は環境教育の上で効果があるものと考えられるが、人が自然とどのように付き合っていけば良いのか、そのような考え方や思想については童話や民話を通じて伝達できる例もあるのではないだろうか。1970年代から出版されている童話や民話をもとにした絵本は近年にも新たに出版されている。読み手の解釈に委ねられる部分もあるが、人という軸に視点を置き、テーマを文化的な側面から捉えたこのような絵本も環境教育の役割を担うものと思われる。

7. おわりに

本研究では、河川・湖沼に関する絵本のテーマについて時系列的に追った。その結果、時代が移るに従ってテーマの変遷がみられ、近年になるほど環境保全への意識を喚起する、つまり環境教育に寄与するメッセージの強い絵本が多くなるという傾向が示された。

人生において初めて接する本となる可能性の高い絵本は、子供の自然観の形成に深く関わるものと思われる。河川や湖沼を題材として扱った絵本が発するメッセージは、感性に訴える豊かな表現によるものが理想であり、環境教育の視点からは学術的に適切な内容が絵本に反映されることも重要であろう。現在、我が国で出版されているこのようなテーマを扱った絵本の中には、海外の作品を翻訳したもののみられるが、その中には環境を広い視野で捉えた、学術的に質の高い表現性の豊かなものが多い。今後、社会的にも我が国の環境教育に寄与する絵本のさらなる質の向上が期待されるが、そのためにはまず、生態学的に適切かつ豊富な教育的コンテンツを提供するために、関連分野の専門家の絵本制作への協力が必要であろう。そして、絵本作家の豊かな手法によって表現されることによって、読み手の感性に訴える作品が創造されることが期待されるだろう。

参考文献

- 1) 吉富友恭 (1999) 米国の水族館展示手法からみた水域環境教育. 環境システム研究 27: 751-756
- 2) 加古里子 (文・絵) (1962) かわ. 福音館
- 3) マックロスキー R. (文・絵), 渡辺茂男 (訳) (1965) かもさんのおとおり. 福音館
- 4) テルリコフスカ M. (文), プテンコ B. (絵), 内田莉莎子 (訳) (1969) しずくのぼうけん. 福音館

- 5) 早船ちよ (文), 市川禎男 (絵) (1973) いさごむしのよっ子ちゃん. 新日本出版社
- 6) 岸 武雄 (文), 梶山俊夫 (絵) (1974) あほろくの川だいいこ. ポプラ社
- 7) 清水達也 (文), 北島新平 (絵) (1975) ふしぎないけ. フレーベル館
- 8) 川崎大治 (文), 太田大八 (絵) (1975) かじかびょうぶ. 童心社
- 9) 吉崎正巳 (文・絵), 須甲鉄也 (監修) (1976) ざりがに. 福音館
- 10) シュルヴィッツ U. (文・絵), 瀬田貞二 (訳) (1977) よあけ. 福音館
- 11) ホーバン R. (文), ホーバン L. (絵), 谷口由美子 (訳) (1979) ハービーのかくれが. あかね書房
- 12) オッペンハイム J. (文), ブランデンバーグ A. (絵), ひがしはじめ (訳) (1981) 川をはさんでおおさわぎ.

アリス館

- 13) 山下明生 (文・絵) (1981) アライグマじいさんと 15 ひきのなかまたち. 佼正出版社
- 14) 手島圭三郎 (文・絵) (1982) しまふくろうのみずうみ. ベネッセコーポレーション
- 15) 吉田遠志 (文・絵) (1983) まいご. ベネッセコーポレーション
- 16) 村上康成 (文・絵) (1983) ピンク、ぺっこん. ベネッセコーポレーション
- 17) 村上康成 (文・絵) (1985) ピンクとスノーじいさん. ベネッセコーポレーション
- 18) 吉田遠志 (文・絵) (1986) まがったかわ. ベネッセコーポレーション
- 19) 高橋宏一 (文・絵) (1987) びよんぴよこがえる. 新日本出版社
- 20) こやま峰子 (文), 渡辺あきお (絵) (1988) あだなはかっぱかっぱ. アリス館
- 21) 村上康成 (文・絵) (1989) ピンク! パール!. ベネッセコーポレーション
- 22) 吉田遠志 (文・絵) (1990) ふるさと. ベネッセコーポレーション
- 23) 村田千晴 (文), 金子健治 (絵) (1990) イワナの銀平海へゆく. 農山漁村文化協会
- 24) 村田千晴 (文), 金子健治 (絵) (1991) 銀平山へかえる. 農山漁村文化協会
- 25) 高家博成 (文), 横内 襄 (絵) (1991) あめんぼがとんだ. 新日本出版社
- 26) おおば比呂司 (文・絵) (1992) サケの旅. フレーベル館
- 27) 梶山俊夫 (文・絵) (1992) なまずのおやま. フレーベル館
- 28) 水谷章三 (文), 佐川美代太郎 (絵) (1992) さけのおおすけ. フレーベル館
- 29) 太田英博 (文), 井上正治 (絵) (1993) カゲロウのけっこんしき. 大日本図書
- 30) 太田英博 (文), 伊東美貴 (絵) (1993) ミズカマキリのしっぽ. 大日本図書
- 31) メール I. (文), シュヴァリエ J. (絵), 林 直美 (訳) (1993) みずべのしぜん. フレーベル館
- 32) ゴダード H. (文), クルーナン P. (絵), 松川真弓 (訳) (1994) もしもちきゅうが・・・. 評論社
- 33) 菊池日出夫 (文・絵) (1994) ヤマセミのうた. 童心社
- 34) 井上洋介 (文・絵) (1995) おいけのまわりをぐるりとまわり. 鈴木出版
- 35) いわむらかずお (文・絵) (1996) カルちゃんエルくんねむいねむい. ひさかたチャイルド
- 36) 須崎俊雄 (文), 紙原四郎 (絵) (1996) 東郷池のピョンタとケロッコ. 農山漁村文化協会
- 37) 関口シュン (文・絵) (1996) ヤマメのがっこう. 佼成出版社
- 38) ヨーレン J. (文), クーニー B. (絵), 掛川恭子 (訳) (1996) みずうみにきえた村. ほるぷ出版
- 39) パークレム J. (文・絵), 岸田衿子 (訳) (1996) 小川のほとりで. 講談社
- 40) ガンチェフ I. (文・絵), 三木 卓 (訳) (1996) みずうみのたから. 講談社
- 41) バック F. (文・絵), 寺岡 襄 (訳) (1996) 大いなる河の流れ. あすなろ書房
- 42) 豊田一彦 (文・絵) (1997) ボートにのって. アリス館
- 43) 田島征三 (文・絵) (1997) 川はたまげたことばかり. 学習研究社
- 44) 宮崎耕平 (文・絵) (1997) ヨットがおしえてくれること. 岩崎書店
- 45) パークレム J. (文・絵), 岸田衿子 (訳) (1997) 海へいった話. 講談社
- 46) カラン R. (文), パートン B. (絵), 松川真弓 (訳) (1998) とべ、カエル、とべ!. 評論社
- 47) さねとうあきら (文), かたやまけん (絵) (1998) かっぱのてがみ. 教育画劇
- 48) 関口シュン (文・絵) (1998) 柳川みず物語. 佼成出版社
- 49) せなけいこ (文・絵) (1999) しっぽのつり. 鈴木出版
- 50) 野田知佑 (文), 藤岡牧夫 (絵) (1999) 笹舟のカヌー. 小学館
- 51) プリマック R.B., 小堀洋美 (1997) 保全生物学のすすめ. 文一総合出版
- 52) 環境庁企画調整局環境計画課 (1996) 環境基本計画絵本「ウンチくんおともだち」について. 生活と環境 41: